

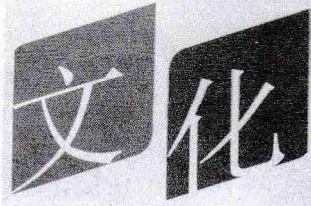
# 観劇記・「コーヒーと 共に生きた男 三浦義武」

洲浜 昌三

浜田を中心に公募で集まった人たちがつくりあげた創作劇が3月24、25の両日、浜田市の石央文化ホールで上演され、1200人近くが舞台を楽しんだ。

劇の主人公は、世界初の缶コーヒーを作った浜田出身の三浦義武。戦後、義武が浜田で喫茶「ヨシタケ」を開いた時、義武の家族と交流があった岩町功氏が企画、演劇集団「創作てんから」と中心に実行委員会を立ち上げ、1年かけて上演にこぎ着けた。

これまでも浜田では、島村抱月や会津屋八右衛門など、郷土の人物や歴史を広い視野と表現で舞台化し、成果を積み上げてきた。今回の「コーヒーと共に生きた男 三浦義武」は市民参加創作劇の第5弾であ



演劇「コーヒーと共に生きた男 三浦義武」  
＝3月24日、浜田市黒川町、石央文化ホール

## 自由な演出 市民躍動

### 情熱や苦悩 圧巻の表現

三浦義武の生涯を簡単に紹介してみよう。  
1899(明治32)年、那賀郡井野村(現浜田市)の旧家に生まれ、浜田中学

から早稲田大学へ。理化学研究所の鈴木梅太郎の下でコーヒーの研究を始める。白木屋の食品部長になり「三浦義武のコーヒーを愛しむ会」を開き、多くの著名人が来て交流。1942(昭和17)年帰郷。45(同20)年井野村村長になる。51(同26)年浜田市で喫茶「ヨシタケ」を開く。65(同40)年缶コーヒーの製品化成功。「ミラ・コーヒー」を日本橋三越で販売開始。80(同55)年死去。

この生涯を劇にするのは難題である。どこに焦点を当てるのか。脚本、演出を担当した浜田出身の美崎理恵さんは、かなり悩んだという。しかし見事に処理し、縛られない自由な演出で楽

しい舞台を創り上げた。

キャストは35人だが、登場人物は200人近い。全員2役以上、多い人は6役を演じた。メインキャストは高校演劇などで活躍した経験者が、縦糸になるストーリーを手堅く演じ、展開した。時代を象徴する数々の歌謡曲を表情豊かに歌い、アンサンブル(大勢の町民や通行人など)は、衣装を何度も変えて時代を再現し場の空気をつくり、スムーズな場面転換に貢献した。常識的な時間や場の概念に拘束されない演出や、自由な発想のアンサンブルがなかったら、小難しい話劇になっただろう。

一幕の東京の場面では、義武のコーヒーを愛した有名人が多数登場する。親友で作家の田畑修一郎、歴史学者の服部之総、片岡鉄平、土師清二、吉屋信子、田口省吾などなど。やがて時代は戦争へ突入。コーヒーは禁止。義武も中国大陸へ。無事に帰還したが意気消沈の日々。妻や子供たちに励まされて、再びコーヒーと格闘。苦闘する義武に見えたのは東京にいた時、コーヒーを愛してくれた友人たちのドッベルゲンガー(同一人物が同時に別の場所に現れる現象)。彼らの励みや妻や子供たちの期待を受け、義武はおいしいコーヒーづくりに没頭し成功する。テーマが凝縮したこの場面は圧巻で感動もあり、優れた舞台表現として印象に残った。

義武は、世界初の缶コーヒーをつくりながら、特許も取らなかった。なぜコーヒーだったのか。義武はラストシーンで独白する。「おいしいコーヒーだね、と言ってほしくて。つまりコーヒーが好きだったんです。素敵な家族と、いい友人と、コーヒーと」

(日本劇作家協会会員、劇研空代表、大田市在住)